

まほろん令和7年度

第2回

館長講演会



日本歴史の扉を開いた遺跡(2)

東京都 大森貝塚

— 縄文時代 —

まほろん館長 石川日出志

令和7年8月23日(土) まほろん講堂 13:30~15:00

13:00 受付開始・開場

日本歴史の扉を開いた遺跡を語る 第2回 縄文時代 ー東京都大森貝塚ー

まほろん館長 石川 日出志

【導入】 日本における近代的考古学は1887（明治10）年に、E.S.Morse モールズが大森貝塚（現東京都品川区）を発掘し、2年後にその研究報告が出されたことに始まります。そこからやがて縄文時代という時代が認識されるようになっていきます。「古墳時代」という時代名称が提案される前のことですが、古墳をつくる人々とは異なるという意識があるので、古墳以後の歴史と対比してみていることになります。

1. 導入：日本考古学の始まりに関する二つの見解

* 1955 年『日本考古学講座』2（考古学研究の歴史と現状）、三上次男編、河出書房）から

（1）日本における近代的考古学は M.S.モールズに始まる＝定説

- ・和島誠一「日本考古学の発達 発達の諸段階」（前掲書 pp.22-36）
- ・欧米の近代科学に立脚した考古学の導入は、Edward Sylvester Morse（1838-1925）による大森貝塚（現東京都品川区）の1877年発掘・1879年報告に始まる。

（2）異説：江戸時代の有職故実研究の考古学面（「旧考古学」）が整っていた。

- ・藤田國雄「日本考古学の発達 歴史時代」（前掲書 pp.93-109）：有職故実研究を強調。
モールズ以後の「新人類学・考古学が江戸時代考古学の発達をほとんど無視したことは、今日から考えると新学問の発達に種々の点で不利益をもたらした。この傾向は伝承して今日におよんでいる。」

（3）日本の考古学の二面性（藤田のいう旧・新考古学）

- ・古墳時代以後の考古学＝遺物の用語では、江戸時代の有職故実研究が基礎をなす。
（例）武器・武具・馬具の名称：刀剣＝身み・拵こしらえ、関まち・茎なかごなど。馬具＝鞍橋くらぼね（前輪まえわ・後輪しずわ）、三繫さんがい（面繫おもがいがい・胸繫むながいがい・尻繫しりがいがい）
* 参考文献：後藤守一 1937『日本歴史考古学』四海書房
- ・先史考古学（旧石器・縄文時代）＝欧米の近代的考古学が基礎をなす。

2. M. S. モールズによる大森貝塚の発掘・研究・報告 【1・2】

（1）M.S.モールズ（1838-1925）とは

- ・USA ポートランド生まれ。ハーヴァード大学で、進化論（ダーウィン 1859『種の起源』）に基づく動物学を学ぶ。腕足類研究。
- ・1877 年、腕足類研究のために来日、6 月 17 日横浜上陸（日本滞在 1877～79・82～83 年）。6 月 19 日上京途中に車中から大森貝塚発見。
- ・偶然欠員だった東京大学（この年 4 月に開設）理学部生物学科動物学の教授職に 7 月 12 日

発令.

(2) M.S.モールズ来日の謎：私の推測

- ・1877年4月東京大学法・理・文・医学部開設。理学部生物学科に動物学の専門家がいなのは前年から周知のこと。(当時文部卿(現在の文部大臣)不在のため)文部省のトップだった文部大輔田中不二麿(1845-1909)が、前年フィラデルフィア万博で日本の教育出品場陳列のため出張、各地を訪問。(※参考文献：田中不二麿 1877『米国百年期博覧会教育報告』文部省)
- この際に、適任者の推薦を依頼しておいたのではないか？

(3) 大森貝塚の発掘調査と研究報告 【1・2】

- ・発掘調査＝ 1877年9月16日予備調査ののち12月まで4回調査。
- ・archaeology→「考古学」の初出： 田中不二麿 1877「大森村古物発見の概記」
- ・1879年“Shell Mounds of Omori”(矢田部良吉訳『大森貝塚古物篇』東京大学法理文学部)刊行
- ・特色： 進化論に基づく生物学研究の方法(詳細な計測と記述)を遺物に援用。遺物図は画工(木村)によるが、計測による実測図。
- ・報告書でのモールズの指摘：**出土資料の分類**と具体的な記述に重点が置かれる。
 - a) 土器： 土器の形と文様が変異に富む。胎土に精粗がある。手作り(非ロクロ)。口縁に突起が多い(18/37点)。cord marked impressionが多い(20/37点)。形は鉢形の椀、大鉢、口が開く椀、皿形、深い器など、用途は煮炊き・食事用・煮沸用など。
*土器破片も全形を判断して器形分類し、突起も詳しく分類する点はすごい！
 - b) 石器が極端に少ない(石鏃・石槍・石錐がない)
 - c) 食人風習： 人骨は埋葬状態ではなく破片(19点)で、シカなどと同様。
 - d) 人骨： 脛骨(1点)が著しく扁平(原始的特徴)
 - e) 時代名称： 先史時代(the prehistoric pottery of Japan：はしがき)、磨製石器時代(the polished stone age：装身具の項)
- ・その後の指摘： プレ・アイヌ説

(4) 常陸陸平貝塚を日本人学生が独自に発掘調査(1879年) 【3】

- ・モールズの教え子たち： 唯一考古学への可能性があった松浦佐用彦の急逝 22歳。
- ・モールズの大森貝塚調査に尽力した佐々木忠次郎(1857-1938：のち昆虫学)と飯島魁(1861-1921：のち寄生虫学)が現美浦村陸平貝塚を発掘調査。報告書作成(Okadaira Shell Mound at Hitachi. 1883)。土器の図はスケッチに戻る。
- ・出土土器が大森貝塚と異なる特徴もつことを確認。→ 大森貝塚＝薄手式(大森式)、陸平貝塚＝厚手式(陸平式)。→ のちに、土器の特徴の違いが、集団の系統や部族の違いなのか、地方差・年代差なのかの議論へとつながる。

(5) 人類学の開祖・坪井正五郎(1863-1913)の西ヶ原貝塚調査(1892年：坪井 1893-95)【4】

- ・大森貝塚類似の土器群出土 → 器形・文様・突起の詳細分類はモールズを意識？

(6) 大森貝塚出土遺物を現在の眼で見ると 【2】

- ・時期： 戦前に大森式土器と呼ばれた縄文時代後期中葉(加曽利 B2 式土器)が多数を占め、その前後(加曽利 B1 式や曾谷式)や晚期中葉(安行 3 c 式土器)がこれに次ぐ。
- ・その他注目すべき点： 晩期の静岡県域の天王山式土器。土版が多い。

3. その後の議論

(1) cord marked の邦訳表記

- ・モールス 1879：cord marked→矢田部 1879：索文→白井光太郎 1886：縄紋 →一般化
- ・貝塚土器（坪井正五郎 1886）から縄紋土器（白井 1886）へ →一般化
- *「縄文／縄紋」と「文様／紋様」：山内清男 1935 の「無紋・縄紋」と「文様・文様帯」（参考）佐原真 1981「縄紋・施紋・無紋化」. 石川＝佐原が山内 1935 の使い分けを理解してないのでは混乱を招く. ならばすべて「文」でよい. 「紋」は「文」から派生したのだから.

(2) 担い手・時代認識は？

- ①. モールス 1879： 先史時代・磨製石器時代（新石器時代）*．プレ・アイヌ説
*モールスは、はしがきで J.Lubbock 1865 Prehistoric Times を引用. ラボック 1865 は、磨製石器の無／有で旧／新石器時代を区分したので、ここでは新石器時代を意味する.
- ②. 坪井正五郎 1887： 「石器時代」
- ③. 1893 年以後、「弥生式土器」が認識されるようになって、縄文土器の認識が明確に.
 - ・人類学教室 1893「弥生式土器」名称発案： 弥生町・西ヶ原農事試験場の土器が共通し、貝塚土器（縄文土器）と異なる特徴をもつと認識.
 - ・鳥居龍蔵の弥生式土器使用者＝固有日本人説（鳥居 1917）により、**縄文土器使用者は先住民と扱われる**ように. → 現在に至るまで縄文文化観に影響.
- ③'. 1896 年「古墳時代」の語の提唱も、縄文土器使用者を別扱いするのが前提.

(3) ミネルヴァ論争（1936 年）： 縄文土器文化の下限をめぐる論争 【5】

*戦前は、縄文土器が東北では弥生・古墳時代～古代にまで存続する説が多数派だった.

- ①. 雑誌『ミネルヴァ』創刊号（1936.2）掲載の「座談会：日本石器時代文化の源流と下限を語る」（江上波夫 31 歳・後藤守一 49 歳・山内清男 34 歳・八幡一郎 35 歳／甲野勇 35 歳）
 - ・後藤「縄紋土器の終りの時代は地方的に夫々違いがある. 最後は喜田先生のいはれる鎌倉時代といふことも地方によっては必ずしも無茶な議論ぢゃない.」
 - ・山内「それは一寸点頭けないですね. 縄紋式の末期、東北地方では亀ヶ岡式土器が一般的ですが、この影響と思われる土器やその他の遺物が関東にも、中部地方にも、畿内にもある.（略）これらは皆その地方に固有な末期の縄紋式に伴ってるのです. 決して弥生式とか、古墳時代に属しているのではない.（略）従って縄紋式の終末は地方によって大差ないと見なければならないでせう.」
 - ②. 同誌 3 号（1936.4）で喜田貞吉（1871-1939／66 歳）が山内に反論： 石器時代遺跡から宋銭や鉄器が発見される.「然るにも拘らず（略）どうして石器時代の終末を以て、地方により大差なしといふ様な事を考へられるであらうか. 余輩には到底判断ができぬ.（略）余輩は常識考古学を提唱したい.」
- 以後 3 回にわたって論戦するも平行線. しかし、そのあと山内による縄文土器型式の編年体系（山内 1937）、関東の縄文土器型式の標準（山内 1938）が提示され、先史考古学の方法による日本列島の歴史展開が示される（山内 1939）ことによって、戦後は山内説が定説となる.

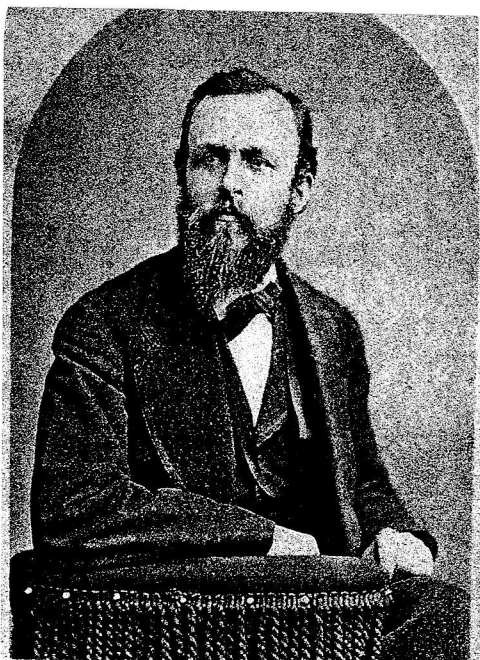
- * 参考： 戦後，時代名称が順次，簡略化された。
 - ・ 縄文／弥生式土器時代→縄文／弥生式時代→縄文／弥生時代.
 - ・ 「…式」も土器型式（様式）だけに用いるように.

4. 大森貝塚の現在

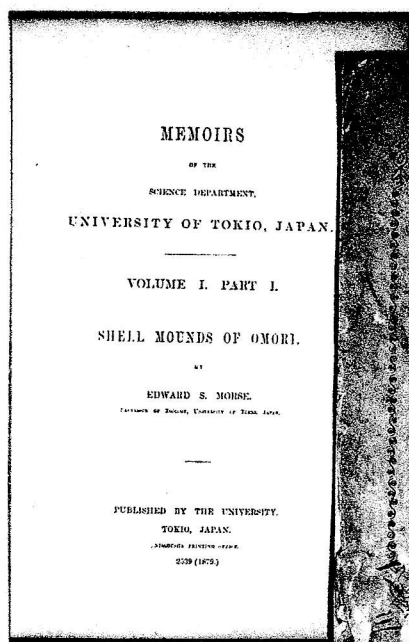
- (1) 大森貝塚はどこなのか？： 二つの記念碑が相次いで建立される。
 - ・ 1929 年 本山彦一（大阪毎日新聞社社長）が現品川区大井に「大森貝塚碑」
 - ・ 1930 年 佐々木忠次郎（モールスの教え子）が東大の記念事業として，現大田区山王に「大森貝塚碑」.
- (2) 1955 年の国史跡指定で二つの記念碑が対象に.
- (3) 品川区による「大森貝塚碑」地区の再発掘調査（1984・1993 年）
 - ・ 1 次調査： 貝塚が 2 地点で現存することを確認： 後期中葉（B 貝塚）と晚期中葉（A 貝塚）. → 大森貝塚地点が確定.
 - ・ 2 次調査： 新たに 2 か所の貝塚と，後期中葉の竪穴住居跡 6 基（加曽利 B 期 4 基・曾谷 1 基），住居を切る晚期中葉（安行 3 c 期）の溝 1 条を検出.

【参考文献・図引用文献】

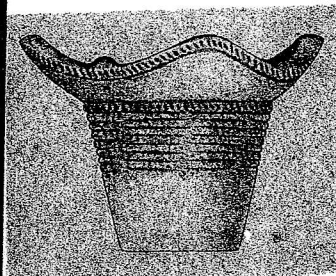
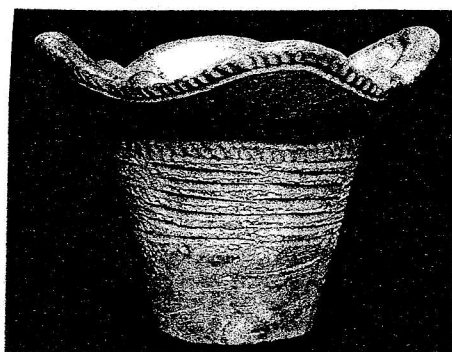
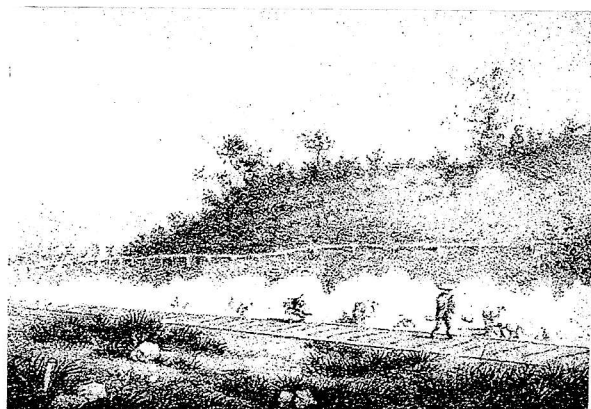
- ・ E.S.モース（近藤義郎・佐原真編訳）1983『大森貝塚一付 関連史料一』岩波文庫（青 432-1）
- ・ エドワード・S・モース（石川欣一訳）2013『日本その日その日』講談社学術文庫 2178（底本=1939 創元選書，創元社）
- ・ 大森貝塚保存会 1967『大森貝塚一発掘九十周年記念一』中央公論美術出版
- ・ 甲野 勇（編）1936・37『ミネルヴァ』創刊号～第 1 巻 6・7 号，翰林書房
- ・ 佐原 真ほか 1977「大森貝塚発掘 100 年記念特集号」『考古学研究』24-3・4，考古学研究会
- ・ 佐原 真 1981「縄文施文法入門」『縄文土器大成』3（晩期），講談社（特に p.167-＊3）
- ・ 品川区立品川歴史館（編・発行）2007『日本考古学は品川から始まった一大森貝塚と東京の貝塚一』
- ・ 白井光太郎 1886「石鏃考」『人類学会報告』1-3
- ・ 坪井正五郎 1886「雑録」『人類学会報告』1-1
- ・ 坪井正五郎 1887「石器時代総論要領」『日本石器時代遺物発見地名表』
- ・ 坪井正五郎 1893-95「西ヶ原貝塚探究報告」『東京人類学会雑誌』8-85～10-106
- ・ 山内清男 1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」
- ・ 山内清男 1937「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1-1，先史考古学会
- ・ 山内清男 1939『日本遠古之文化』補註付新版，先史考古学会



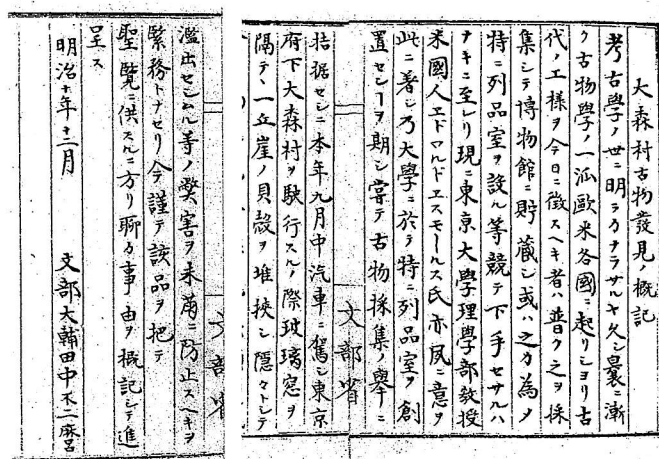
E. S. Morse(1838-1925)



"Shell Mounds of Omori"

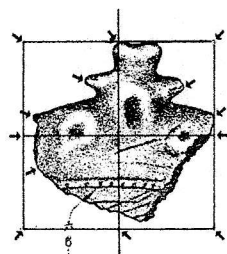
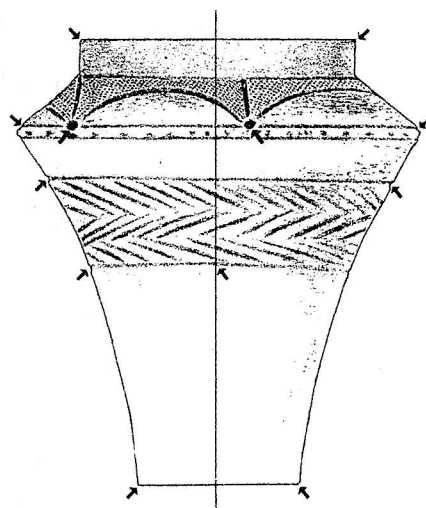


大森貝塚の発掘スケッチと出土した縄文土器



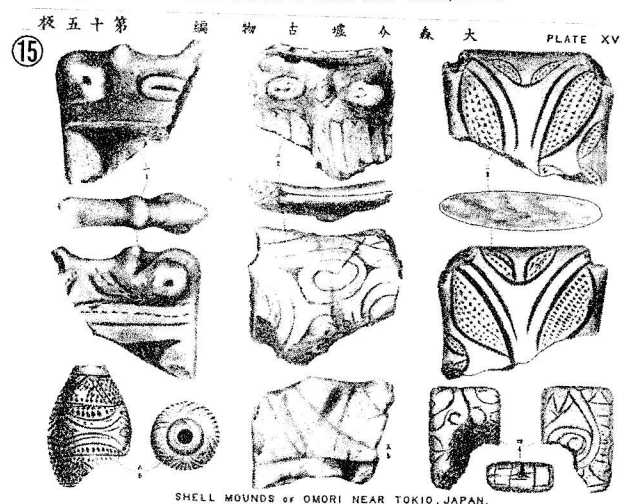
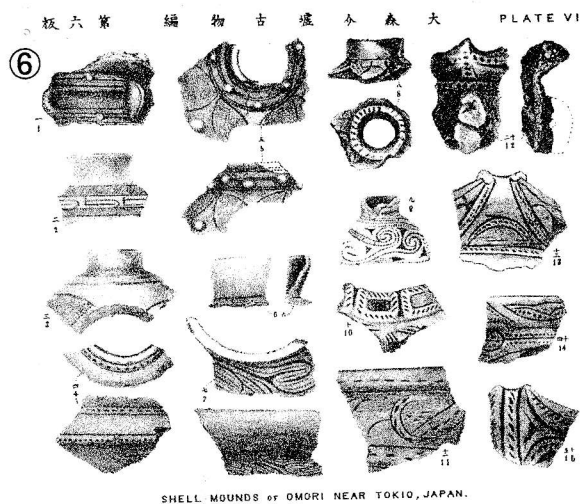
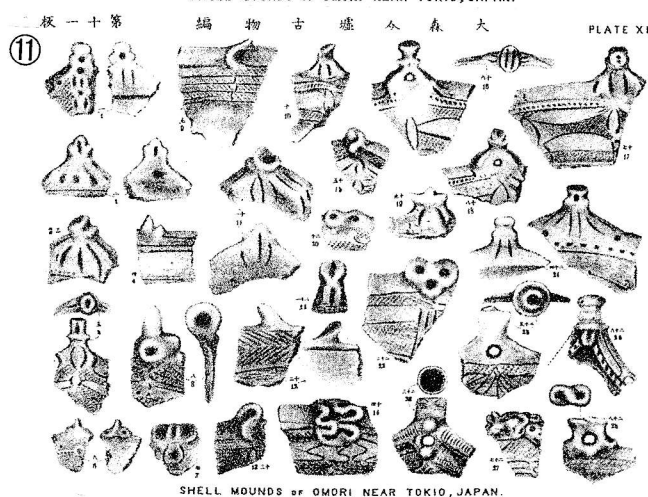
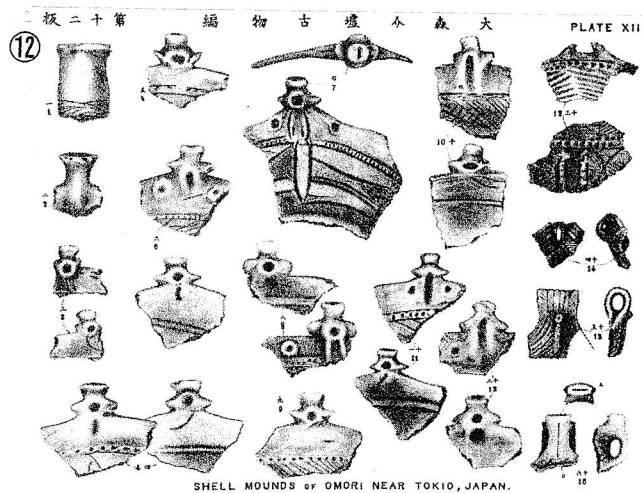
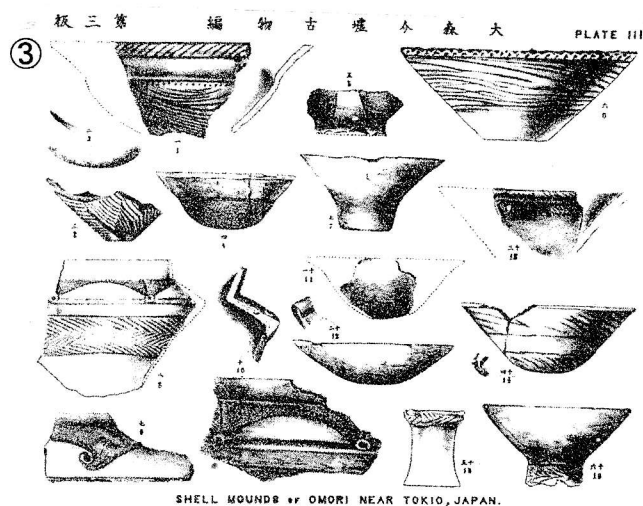
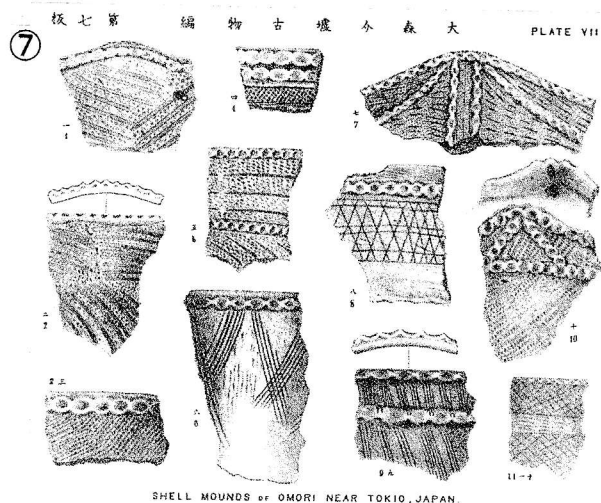
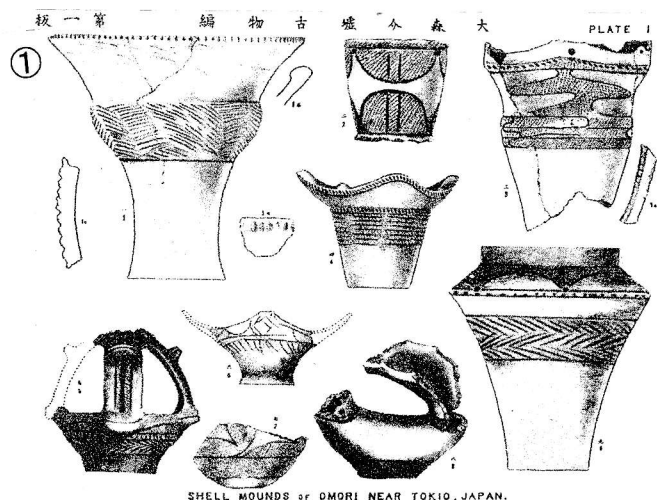
「大森村古物発見ノ概記」

(いずれも品川区立歴史館 2007)

「申」字形の基準線をひく
矢引は針痕のみとめられる位置縦の基準線を引く。矢印は
針痕がみとめられる位置

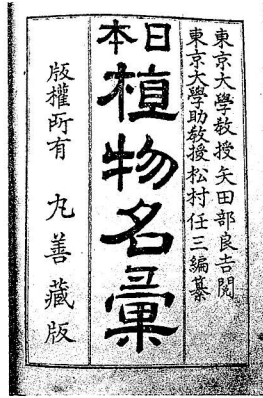
土器も計測して実測

(佐原 1977:p.33)

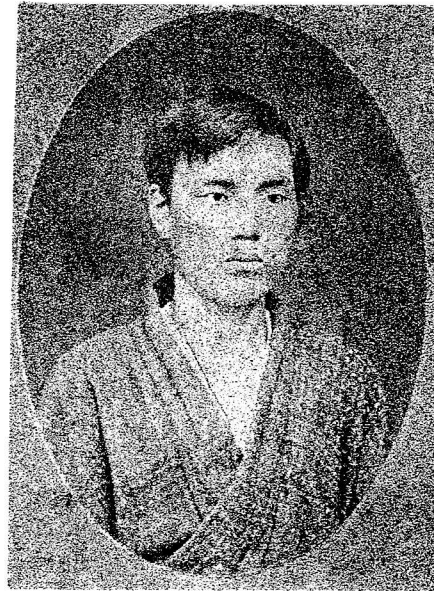




松村任三(1856-1928)



49.『日本植物名彙』
明治17年(1884) 松村の代表的な著作で、日本人の手による初の植物目録。



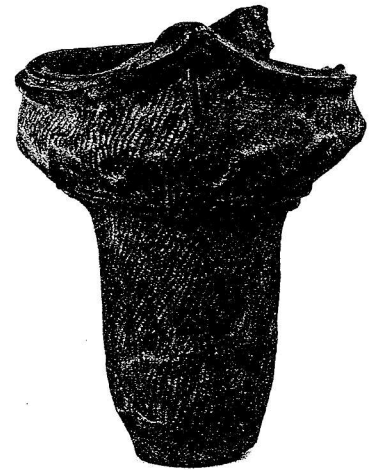
松浦佐用彦(1856-1878)



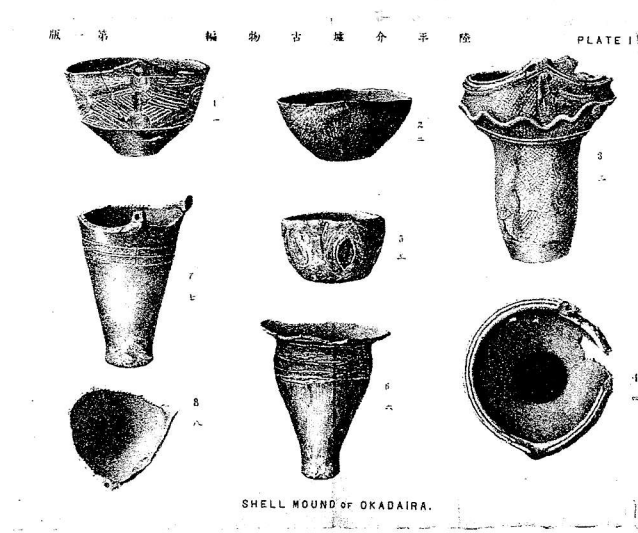
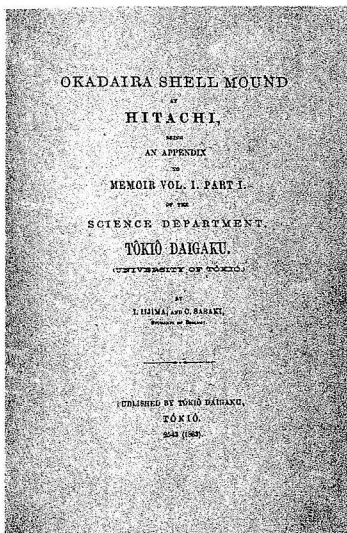
佐々木忠次郎(1857-1938)



飯島 魁(1861-1921)

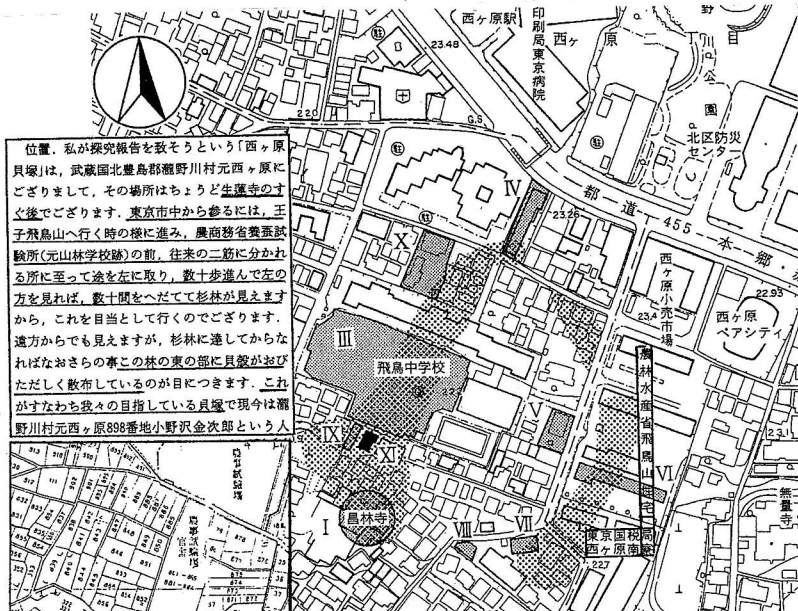


60. 陸平貝塚出土・深鉢形土器
PLATE1-3 縄文時代中期(加曾利E式)

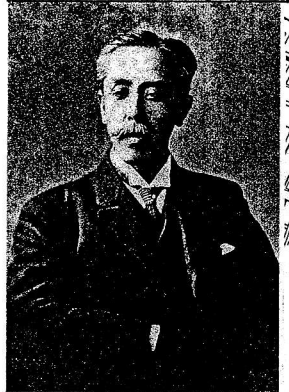
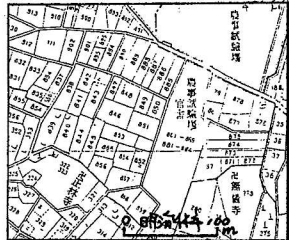


61. "Okadaira Shell Mound at Hitachi"

明治16年(1883)
日本人の手による初の発掘報告書。体裁はモースの大森貝塚報告書に倣ったもので、図は写実的で精美だが、ややスケッチ化している。
発掘から報告にあたって、佐々木はモースに手紙を送り、成果を報告し、モースの指導を仰いでいる。



位置、私が探究報告を致そうという「西ヶ原貝塚」は、武蔵国北豊島郡瀬野川村元西ヶ原にござりまして、その場所はちょうど生蓮寺のすぐ後でござります。東京市中から参るには、王子飛鳥山へ行く時の様に進み、農商務省養蚕試験所(元山林学校跡)の前、往來の二筋に分かれる所に至って途を左に取り、数十歩進んで左の方を見れば、數十間をへだてて杉林が見えますから、これを目当てとして行くのでござります。遠方からでも見えますが、杉林に達してからなればなおさらの事この林の奥の部に貝殻がおびただしく散布しているのが目につきます。これがすなわち我々の目指している貝塚で現今は瀬野川村元西ヶ原898番地小野沢金次郎という人



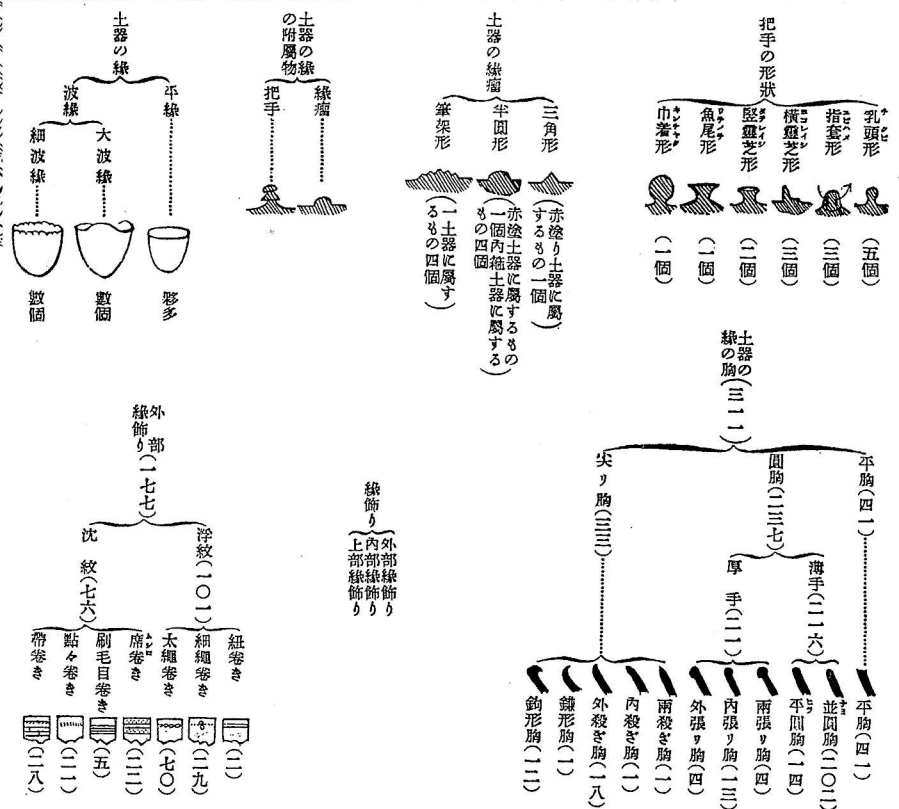
●坪井正五郎
日本における人類学の創始者で、人類学の一分野として考古学の組織化・普及をはかった。

酒詰 (1951) による貝層分布範囲

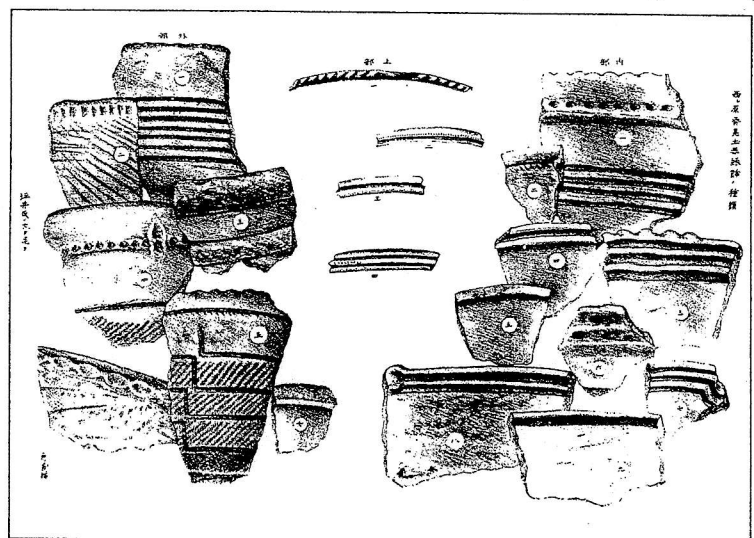
調査年	地点名等	調査年	地点名等
I 1953	昌林寺	VI 1988	農林水産省飛鳥山住宅
II 1989	第一勧業銀行飛鳥アパート	VII 1951	本郷学園調査
III 1951	飛鳥中学校	VIII 1996	古川邸
1996/98	明治大学調査	IX -	試掘調査のみ 貝層確認
IV 1987	小泉ビル	X -	"
V 1985	大野邸	XI 2002	土屋邸

坪井正五郎による西ヶ原貝塚の発掘(1892年)はどこか?

IV地点一帯で弥生時代の方形周溝墓



坪井正五郎の西ヶ原貝塚報告の
土器分類はモールスを意識？
(坪井 1893-95)



坪井正五郎による 1892 年西ヶ原貝塚出土縄文土器の分類・分析

ミネルヴァ

原始文化の古代工藝
人類の古民族文化の綜合雜誌
民俗信候事物起源



翰林書房



明治四十二年

下駄の起源

日本古来の民俗文化の発展を語る

ミネルヴァ 四月號 目次

- 第七圖版 興安嶺山中コルバンボロツク(ワール・マンハ)存在契丹皇帝陵壁畫
第八圖版 ラブレットを著けたエスキモーと北千島發見のラブレット及ランパ
日本石器時代の終末期に就いて……………喜田貞吉(1)

ミネルヴァ 五月號 (第一卷第四號) 目次

- 第九圖版 東京市豊島區中新井石器時代遺跡の發掘

日本考古學の秩序……………山内清男(1)

ミネルヴァ 六月號 (第一卷第五號) 目次

- 第十圖版 故理學博士松村謙氏
第十一圖版 岩手縣下・綾織の縷石とオコナイ様

「あばた」も「えくぼ」も「えくぼ」も「あばた」……………喜田貞吉(1)

——日本石器時代終末期問題——

ミネルヴァ 七・八月合併號 (第一卷第六・七號)

有史以前の大東京 目次

又も石器時代遺跡から宋錢の發見……………喜田貞吉(35)

考古學の正道……………山内清男(37)

——喜田博士に答ふ——

ミネルヴァ 創刊號 目次

- 第一圖版 鼠燈臺
第三圖版 千葉縣曾谷貝塚の人骨と爐趾
第四圖版 上野國稻荷山古墳と同地出土の石製下駄
北米チルカット族巫術師の像
下駄の起源……………後藤守一(1)
酒の始原を尋ねて……………大山 柏(9)
貴人の墓地から發見された古代の酒倉……………(12)
古代ポンペイの酒屋……………(12)

日本石器時代文化の源流と下限を語る……………江上波夫 八幡一郎(46)

——座談會——

後藤守一 甲野 勇

1936年

ミネルヴァ創刊号の対談

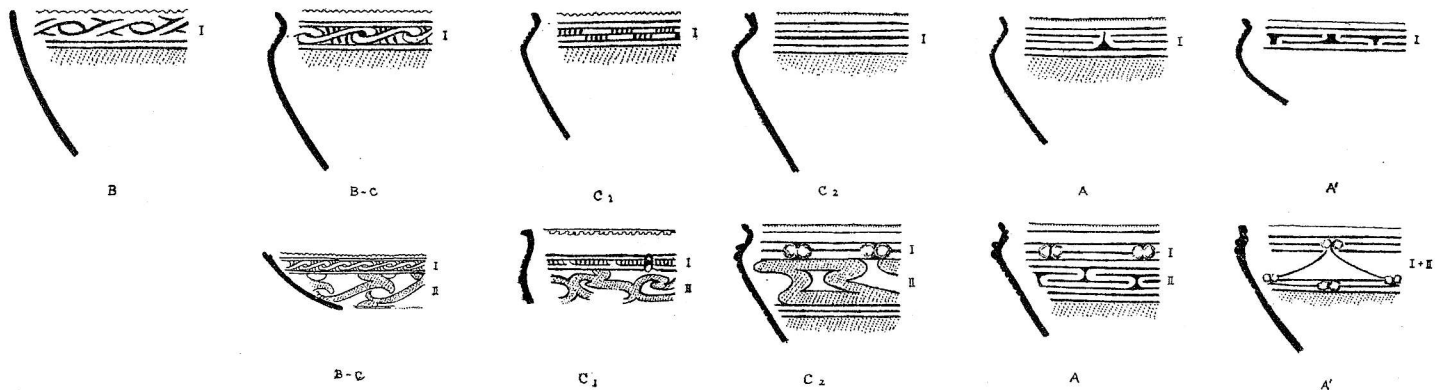
後藤 縄紋土器の終りの時代は地方的に夫々違ひがあると思ふ。そして最後は、喜田先生のいはれる鎌倉時代といふことも地方によつては必しも無茶の議論じゃないと思ふ。それから奥羽地方のみでなく、關東地方邊りでもメインストリートから離れてゐた所は可なり遅くまでこれを續けてゐたと思ふ。少くも古墳の末期にも地方によつては縄紋土器が使はれて居たと云ふことは考へてもいいんじゃないかと思ひます。

山内 それは一寸點頭けないですね。縄紋式の末期、東北地方では龜ヶ岡式土器が一般的ですが、この影響と思はれる土器やその他の遺物が關東にも、中部地方にも、畿内にもある。それから未だ確實ではないが、もう少し向ふ迄行つて居るらしい形跡がある。これらは皆その地方に固有な末期の縄紋式に伴つてゐるのです。決して彌生式とか、古墳時代に屬しては居るのではない。だから東北の石器時代の縄紋式末期即ち龜ヶ岡式に併存し、交渉を持ち得たものは、關西の彌生式でも古墳時代でもない。矢張縄紋式、この地方の末期の縄紋式であることになる。従つて縄紋式の終末は地方によつて大差ないと見なければならぬでせう。

縄紋土器型式の大別(のち「縄紋土器型式の大別と細別」と改める) (山内 1937)

	渡 島	陸 奥	陸 前	關 東	信 濃	東 海	畿 内	吉 備	九 州
早 期	住吉	(+)	槻木 1 〃 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曾根? × (+)	ひじ山 粕 畑		黒 島 ×	戰場ヶ谷 ×
前 期	石川野 × (+)	圓筒土器 下層式 (4 型式以上)	室濱 大木 1 〃 2 a,b 〃 3-5 〃 6	蓮田式 花積下 關 山 黒 濱 磯 a,b 十三坊臺	(+) (+) (+) 踊 場	銚ノ木 ×	國府北白川 1 大歳山	磯ノ森 里木 1	蕨?
中 期	(+) (+)	圓筒上 a 〃 b (+) (+)	大木 7a 〃 7b 〃 8 a,b 〃 9, 10	御領臺 阿玉臺・勝坂 加曾利 E 〃 (新)	(+) (+) (+) (+)			里 木 2	曾畑 阿高 出水 }?
後 期	青柳町 × (+) (+)	(+) (+) (+)	(+) (+) (+)	堀之内 加曾利 B 〃 安行 1, 2	(+) (+) (+) (+)	西尾 ×	北白川 2 ×	津雲上層	御手洗 西 平
晩 期	(+)	龜ヶ岡式 (+) (+) (+) (+)	大洞 B 〃 B-C 〃 Cl, 2 〃 A, A'	安行 2-3 〃 3	(+) (+) (+) 佐野 ×	吉胡 × 〃 × 保美 ×	宮瀧 × 日下 × 竹ノ内 × 宮瀧 ×	津雲下層	御 領

- 註記 1. この表は假製のものであつて、後日訂正増補する筈です。
2. (+)印は相當する式があるが型式の名が付いて居ないもの。
3. (×)印は型式名でなく、他地方の特定の型式と關聯する土器を出した遺跡名。



第一圖 頸部文様帯と體部文様帯の重疊を示す模型圖
B, C, A, A' 型式の略號 B-C B式とC式の中間の型式
C1: C式舊型式 C2: C式新型式

第一圖 頸部文様帯と體部文様帯の重疊を示す模型圖 (續)
I. 頸部文様帯 II. 體部文様帯

龜ヶ岡式土器の大洞 6 型式細別 (山内 1930)

山内清男の方法・論理

「仁徳陵」副葬品 なぜ流出?

明治期に出土、埋め戻し漏れか

世界遺産に登録されている国内最大の前方後円墳・大山古墳(仁徳天皇陵、堺市)から明治初期に出土した副葬品のうち、金銅装刀子など4点が埋め戻されずに現存していた。その「新事実」は、考古学関係者に大きな衝撃を与えた。地中に眠っているはずの副葬品は、なぜ流出したのか。

(大阪文化部 辰巳隆博)

大山古墳は、天皇や皇族の墓として宮内庁が管理する「陵墓」で、発掘が厳しく制限されている。現存していた4点は、国学院大博物館(東京)が昨年6月に美術商から購入した、旧三井物産初代社長・益田孝(1848〜1938年)のコレクションに含まれていた。刀子(長さ10・5センチ、最大幅2・2センチ、厚さ0・9センチ)の刀身は鉄製とみられ、ヒノキの鞘はX線分析の結果、金メッキを施した銅板で覆われ、銀製の鍔で留められていることが分かった。持ち手は欠損している。鉄の甲冑片にも金メッキの銅板が貼られていた。

刀子などは紙に包まれて



大山古墳の全景(2020年、本社ヘリから)。点線で囲っているのが副葬品が出土した前方部の斜面

おり、表には「明治五年」「仁徳帝御陵」などの墨書きとともに「栢」の印があった。同博物館の調査で浮かび上がったのが、明治期の絵師、栢木貞一郎(1841〜98年)だ。栢木は江戸の商家に生まれ、古美術の鑑定・収集家として知られた。文化財保護の黎明期だった1872年(明治5年)、奈良・正倉院で初めて行われた文化財調査「壬申検査」に参加。その最中、大山古墳の前方部の斜面が崩れ、石棺を収めた竪穴式石室周辺から鍔や鉄刀など40点以上が発掘されたとの連絡を受

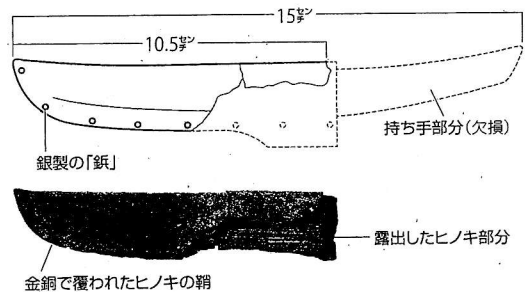
5世紀の金銅装刀子 貴重

柏木は73年に官位を得て明治政府の美術・博物館行政に携わった。副葬品は栢木の死後、後に国宝となる「源氏物語絵巻」などとともに、交流のあった益田の手に渡ったとされる。

柏木は「埋め戻す際、取りこぼされたのを栢木が保護したのだらう。丁寧に紙に包み、出所伝来を書いて後世に伝えようとしていることから、懐に入れようという行為ではなかったと思う」と言う。

同博物館の内川隆志副館長は「埋め戻す際、取りこぼされたのを栢木が保護したのだらう。丁寧に紙に包み、出所伝来を書いて後世に伝えようとしていることから、懐に入れようという行為ではなかったと思う」と言う。

◇「金銅装刀子」の想像図(上)と実物(下)



宮内庁の担当者は発見について「急な話題で驚いている。国学院大から情報を得て、刀子などの由来を調べる必要がある」とする。

刀子は、形状をみると古墳の築造から数十年後の5世紀後半に国内で使われていたものに似ているという。5世紀の金銅装刀子は日本でも、朝鮮半島でも出土しており、貴重な品だったことがうかがえる。

注目すべきは、この刀子が主たる被葬者の副葬品ではないことだ。前方後円墳では、主たる被葬者は後円部の頂上付近、2番手は前方部の頂上付近に埋葬されるのが普通だ。前方部斜面から見つかった刀子は、3番手以降の被葬者のものと考えられる。

大阪府立近つ飛鳥博物館の白石太一郎名誉館長は「前方部斜面にこれだけ豪華な副葬品があったということは、後円部の主たる埋葬施設にはさらに豪華な副葬品が納められていることが予想される」と言う。今回の発見は、ベールに包まれた陵墓の全貌を想像する手がかりとなりそうだ。

刀子は、堺市博物館の企画展「堺のたからもんー金で魅せる・果を愛でる」で9月7日まで公開される。